アーシュラ・K・ル・グィンの『所有せざる人々』における「仕事」について

ラーソン・マイケル

『所有せざる人々』の舞台

アーシュラ・K・ル・グィン (Ursula K. Le Guin) の SF ユートピア小説『所有せざる人々』 (The Dispossessed, 1974 年) における「仕事 (work) 」という概念は、「労働（labor)」の他に「ライフワーク 〜つまり生涯を通じて従事する仕事」も含まれます。本発表では、このサブタイトルにもなっている “An Ambiguous Utopia” の小説における「仕事」を分析しました。

『所有せざる人々』の舞台は、アナキスト哲学者の考えによく似ている架空の革命家オドーが統治するアナレスという惑星です。主人公のシェヴェックはアナレスで生まれ、中央政府や政治指導者、金や私有財産、警察や刑務所、犯罪などがほとんどない社会で育ちました。シェヴェックは物理学をライフワークとしていますが、社会の息苦しいイデオロギーの風潮が彼の研究を妨げていることに気づきます。

理想的な労働

アナレスは「労働の自由」を理解することを奨励する社会です。小説に頻繁に登場する「仕事」という用語は大まかに分けて二つの意味があります。1 つ目はマルクス主義的な文脈での「労働」、人間が自然に自分の意識的な類的存在の実を示すプロセスで、２つ目はライフワーク・天職の意味です。

ル・グィンはかつて『所有せざる人々』で表現した政治思想は、マルクス主義よりアナキスト哲学のほうに影響を受けたと述べたことがあります。しかし、先に述べたマルクス主義の労働概念について、アナキストとマルクス主義ではともに労働の性質を理解する方法が共有されています。マルクスにとって、「自己の素質をあらゆる面で陶冶する手段が実存するようになり、それゆえに、共同社会において初めて、人格的自由が可能になる」と述べています。この引用では、マルクスが労働の多様性、ならびに労働を通じた個人的な満足とコミュニティの絆との関係を強調しています。現に、それは『所有せざる人々』の最初の方の章に反映されており、アナレスでは労働が強制されることはありません。アナレス人は、世界中のコンピューターネットワークにより人々をオープンポジションにマッチングする労働区別局 (Division of Labor office) を通じてそれぞれの尽力を調整します。アナレス社会で、自分の労働を志願することは絶対的な要件ではありませんが、それは “the privilege and obligation of human solidarity”を受け入れる人々にとっては、基本的に期待されています。したがって、自発的で自由ではありますが、この労働システムは、各コミュニティ内で設定された社会的期待によって条件付けられています。同様に、困難または望ましくない仕事は共同で行われ、すべてのアナレス人は通常、１０日に１回ボランティアでそれらを行います。さらに、特に必要な場合、または極めて重要なプロジェクトを完了するために、アナレス人は一種の労働草案を通じて特別なプロジェクトに貢献するように要求される場合があります。実際、シェヴェックは彼の専門分野外でそのようなプロジェクトに２回配置されています。以上のことは、アナレスの相互扶助のシステムが、理想的と思われる労働条件をどのように作り出すかを示しています。やるべきことはまだ大変で、人々は時々自分の好まない労働をすることがあります。また最悪の場合、流通の不足と問題、さらに飢饉や広範に広がる不安感があります。ただし、アナレスでの労働は本質的に自発的であり、労働者は彼らの労働から疎外されていません。マルクスによって議論された、非疎外の説明と同様に、アナレス人は自分自身と彼らの兄弟姉妹の絆を強くします。また、自ら共同性を肯定しながら、自身の個性を客観化します。非常に厳しい時でさえ、これはアナレス社会の連帯感を可能にし、正式な統治構造の代わりに、仕事自体がコミュニティを作成することが理解されるでしょう。

官僚主義とアナレスの召命

しかし、アナレス社会の労働システムは、最初は理想的であるように見えますが、ライフワークの観点から「仕事」を考えると、ル・グィンが小説のサブタイトルで言及している曖昧さが理解されるように思います。ここで、ライフワークとは、個々の労働行為を結びつけるより大きな目的、特に人々が召命 (vocation) を感じる目的を意味します。そうしたライフワークが社会に与える大きな影響を考えると、そのようなプロジェクトの完全な多様性の自由な追求を可能にすることは、社会における自由の真の試練です。この最後の点で、オドーの信奉者がアナレスに定住してから１５０年以上、社会が停滞し始めていることがわかります。

アナレスの人々は、自分たちを堕落した故郷から切り離し、自分たちの生活様式が他の社会と比較して完

全にユートピア的であると信じ、自分たちの社会をその進化において完全であると見なし始めました。このユートピアの静的 (static) な概念は、独断的なイデオロギーを生み出します。そこでは、オドーの文章はほとんど法律のように扱われ、労働区別局や生産及び分配の調整機関 (Production and Distribution Coordination; PDC) などの特定の重要な社会組織が官僚機構の力を引き受けます。

アナレス人は、それを認識せずに、適切に考案された社会が永続的な革命であることを忘れています。あるキャラクターが言うように、 "'Change is freedom, change is life–is anything more basic to Odonian thought than that? But nothing changes any more! Our society is sick'"。ユートピアは不変の価値観や信念のセットではなく、継続的な進化のプロセスであるという考えは、Ernst Bloch によって説明されたユートピアの衝動を前景化する傾向があるユートピア研究と多くの共通点があります。そして、ル・グィンの小説は、Ruth Levitas の Utopia as Method: The Imaginary Reconstitution of Society における議論を先取りする形で、ユートピアの "the process of imagining ourselves and our world otherwise"という役割を示しています。特定の価値観を永続的で不変のものとして固定し、それらの社会的配置を階層に固めることによって、アナレス人は絶え間ない進化の必要性を表現するオドーのユートピア的な理想から離れました。

物語の中で、シェヴェックはクラスを受講し、地域の研究所で研究を行うことによって彼の職業を追求します。そこでは、選択した専門分野である時間物理学への彼自身の興味を比較的自由に追うことができます。彼がアナレス最大の都市であるアベネイに引っ越し、そこの研究所でライフワークを続けているとき、同時性の原理 (simultaneity principals) の研究を追求する自由を否定されています。これは、アベネイの研究所での彼の仕事が、連続性理論 (sequency theory) と呼ばれる一種の時間物理学のみを信じ、シェヴェックの代替理論への関心を却下する嫉妬深い物理学者、サブルによって妨げられているためです。特に、サブルはアナレスと他の惑星の間を移動する宇宙貨物船に送る資料も管理しています。サブルの同意なしに、シェヴェックは自分の作品を公開したり、他の科学者に調査結果を伝えたりすることはできず、コースを教えることさえできません。

生産及び分配の調整機関内でのサブルの年功序列と権力は、シェヴェックが彼から逃げて通れないことを意味します。また、これはシェヴェックが一人で完成させた作品を、サブルが自身を共同著者として不正に提示することを許可しなければならないことも意味します。したがって、それは労働のレベルではなく、職業の領域で社会が侵食され始めており、そのユートピア的な約束は曖昧になっていることがわかります。真のアナレス人のやり方で、シェヴェックは単にこの状況を受け入れるだけでなく、弁証法的プロセスを通じて彼の社会を革命に戻そうと試みます。

結論

アナレスの社会で形成され始めた、さまざまな職業の追求を妨げる構造に関して、その背後にある主な原因は、一連の反対が生じ、準官僚機構に帰化したことであるように思います。これらの二項対立は孤立につながり、アナレス社会のアナキスト主義の原則の進化を妨げたため、色々な種類の革新とアイデアが避けられ始めています。小説では、これらの対立には他の惑星ウラス対アナレスも含まれます。自己への忠誠対他者への好奇心。そして、特に物語にとって重要なのは、連続性理論対同時性の原理です。

『所有せざる人々』には仕事の性質と重要性について示唆に富むことは間違ありません。具体的には、ル・グィンの曖昧なユートピアは、ユートピアの概念を広げることを促します。労働などの社会における日常の状況に加えて、私たちは自分の人生の仕事も考慮する必要があります。よりユートピア的なコミュニティは、単に完全な労働条件を達成することの問題ではなく、個々のメンバーが職業やライフワークを通じて行う自由の要求に応えて継続的に進化しなければなりません。したがって、ユートピアでの作業の真の課題は、相反する要素や対立に開かれつつ、それを弁証法的に昇華する必要性があるように思います。

主な参考文献

Bloch, Ernst. *The Principal of Hope: Volume 1*. Cambridge, MA: MIT Press, 1995.

Le Guin, Ursula K. *The Dispossessed.* Harper and Row: New York, 1974.

—— *Hainish Novels & Stories, Vol. 1*. "Introduction" New York: Library of America, 2017.

Levitas, Ruth. *Utopia as Method: The Imaginary Reconstitution of Society*. London: Palgrave Macmillan, 2013.

Philips, Julie. "Out of Bounds: The Unruly Imagination of Ursula K. Le Guin." *The New Yorker*, 17 Oct. 2016, pp. 38-45

マルクス・カール 藤野渉訳 『経済学・哲学手稿』 大月書店 、1963 年

マルクス・カール 廣松渉編訳 ; 小林昌人補訳 『ドイツ・イデオロギー』岩波書店 、2002 年